

1995年8月1日発行(毎月1回1日発行)第46巻第2号(通巻964号)1951年4月24日第三種郵便物認可

SCHOOL HEALTH EDUCATION

健康教室

第537集

1995.

8



東山書房

阪神大震災からの

～震災から半年がたって～

レポート その2

◆インタビュー◆

阪神大震災における 学校・教師の役割と 教育の再生

～現場からの声を聞いて学ぶこと～

坂本 玄子さん

日本体育大学大学院 文教大学女子短大学部
聖マリアンナ医科大看護専門学校講師

学校が救済活動のセンターに

今回の震災で、ボランティアの自発性についてはよく言われています。案外、考えられていないのが、学校が救援活動のセンターになったということではないでしょうか。

考えてみれば学校というのは学区域があって、約半径500mに1校ずつ分布しているわけですし、子どもたちの名簿もあります。ですから行政的な意味で管轄区の中央的な役割をしますし、それに文化センターでもあります。

たとえば、いざというときに東京などは大きい建物も多く「区役所へ逃げよう」「〇〇病院に逃げよう」とか言えますが、今回の長田町みたいに住宅の密集したところでは、学校へ逃げるしかない。また、東京などと違ってまだ地域共同性がある

とか、学校に対する親和性があったということも言えるかもしれません。

こうしたことから、やっぱり学校に逃げようと思いますよ。学校が避難所になるというのは当然、自明の理だったと言えます。

自治組織と自治活動

このように集まった1000人なり2000人なりの人々に対する救護体制に学校がその役割をすることになった。校長先生や先生たちは人々を叱咤激励して、教室や体育館にいる住民の中に係を決めたり、まとめたり、学校の自治会や生徒会、学級会と同じように組織していった。自治活動の組織には普段から慣れているわけですから。また、避難して来た人もよく協力して組織化されたから救済が進んだわけです。

とにかく震災避難に対しては、自治組織ができなければ救済活動ができないということです。それが教育の場である学校で活用できたということが大きいと思います。

また、大きな意味で避難して来た人たちの中にも自治活動が起きてきたことがあげられます。先生方の指導もありますけれど、自治活動しなければパニックになりますよ。盗難、暴行、婦女乱暴なども無秩序の中から起こるわけです。

また、教師が活動したということの他に、場所がよかったというのもありますね。誰でも子どものころは学校へ通っていたわけですから学校で悪事はしにくい。だからその場所が持っている性格が、自治組織を作ったということもあると思います。

自治組織が作られたことと、自主活動がはじめられたことが一緒になって、みんなの気持ちをそろえた。それがすごく大きいと思います。

教師の活動

ある新聞社の人から「僕は去年の12月まで、もう日本の教育は崩壊したと思っていた。いじめの問題、その他のことも含めて、教師は『何をやっているんだ』と思っていた。しかし、この震災で見直した」と言っていたと聞きました。それは教師たちの献身的な活動を見てのことだそうです。

たとえば教師の活動で一つ例をあげてみますと、便所の管理がありました。水がこないから便所が半日でいっぱいになってしまう。それをかたづけ歩くのがみんな教師なんだそうです。水洗便所の排泄物を流すのにプールの水をくみ出して来るんですが、そんなのすぐなくなってしまいます。だから「排泄物は新聞紙の上にして、包んで外へ持って行って埋めてください」とか、そういう指導をし、その作業を教師がした。

そこに来た人たちを守ろうという意識が自然に出ている。そういう活動を見ても教師が率先して献身的にやっていたと、方々から言われています。

震災における住民の民度とモラルの高さ

また、今度の震災で全般的に住民の「民度」と「モラル」の高さが目立った点が言われています。被災地を回った大阪市立大学・法学部の加茂利夫先生が、大阪府保険医協会の雑誌の中で「被害を緩和した戦後民主主義のストック(蓄積)」として次のように書かれています。

①マスコミの応対が非常に早かった。

官庁よりもです。マスコミが早く報道したおかげで、視聴者も大変なことが起こったんだと、すぐに感じられた。みんな情報というのはリアルタイムで感じるわけですから、「あそこの病院がダ



メだ」とか知ることができたということです。

②コンビニやスーパーが物資を放出した。

企業倫理からの行動も官庁よりは早かったということです。普通なら高く売ろうと思えば売れるものを値段も変えずに出した。これは今回のような一極の地震などでは、ものすごく人心を安定させるのです。この人たちのモラルというか、企業人としての任務の自覚があったということですね。

③市民のモラルが非常に高かった。

以上の3つが、あとの混乱(パニック)を防いだ要因と書いています。市民の助け合う気持ちの高さ、自発的協力の意識の高さでは、いくつかの話を書きました。

たとえば、ある先生の話では、自分は当時、大阪にいて家に戻れない。家に電話をしてやっとかかった。「大丈夫か? 水はあるのか?」と緊急の話をしている最中に、10円玉がなくなりかけた。そうしたら、自分の背の後ろから、だまって誰かの手が出てきて10円玉を入れてくれた。しかも、誰も「自分が入れました」などと名乗り出ない。そういう民度の高さ。周りが他者の苦難を自分のことのように思っている。

また、愛知県の青少年フェスティバルでは私教連傘下の中学生たちがすごく活躍している。その

メンバーは、3月の終わりまでに2000万円集めたそうです。こういうことをすぐにできるのは、普段から自治活動をやっているからなのです。たとえばある生徒会長などは、すぐに街頭へ飛び出して「カンパを送ろう」と訴えた。みんな子どもたちが率先してやったのです。

ここでの活動というのは、すべて自治的なものなのです。私はフェスティバルの素晴らしい自治活動の中から、この心打つ若者の行動が生まれたことがとても大事だと考えます。

別に結びつけるわけではありませんが、一般に学校での保健委員会の自治活動なども、こういうときに真価を発揮するのではないかと思います。

それから献血の話もあります。被災者のための献血を大阪あたりでは訴えられたようです。そうしたら長蛇の列で、自分の番が来るのに2時間もかかるのに並んでくれる。残念ながら普段はこういうことはないかもしれませんが、ここ一番「大変だ!」というときに、みんながそっぽをむいて「自分だけが」となりがちです。そのパニックになったときに、「応援しよう」というほうへ人々の心は動いたのです。

こうした一般市民の助け合いの民度の高さといい、教師たちの献身といい、現地に行かなければわからない人間の希望みたいなものが、一つの大切な側面として、我々に見えたものが今回の震災にあったのです。

関東大震災のときは違ってパニックにならなかったということについては、報道がどんどん入ったということもあるでしょう、戦後の民主主義のストックがあったということもあるでしょうが、ある意味ではやっぱり戦後教育の力だと思います。これからどのように認識されていくのか不明ですが、教師がまず、そのことを自覚することが大事ではないでしょうか。

自分の意思で動くこと

阪神の高校生が震災直後に書いた短文が、教師の手で小冊子にまとめられたものがあります。これにはいろいろな衝撃が書いてあるのですが、そのなかの子どもの話に、「どうしたんですか? 手伝いましょうか?」と困っている人に声をかけたというのがありました。今まで他人との関わり合いがわからなくて、どちらかというと人間不信に陥っていた子どもたちが、本当に困っているときは「声をかけていいんだ」ということが分かったというのです。それまで困っている人に声をかけるなどということは、ほとんどなかったわけですが、「それをしていいんだ」「するとすごく喜んでくれるんだ」ということが、少年たちを動かしたのです。

個々のケースのそうした例と、市民の中から起きてきた、主体的で自治的な「自分の足で立つ」という意思が非常に強いということが、いろいろな場で言われました。若い人はあまり意識していないようですが、私などはある意味ではそのことに非常に感動しました。戦争中に関して言えば竹やりと砂と水を持って防空訓練して、自治活動といっても、それは上からの動く訓練なのです。在郷軍人によって教育されていた。今回はそれとは全く違う現象です。人を助けるということはどういうことかとそれぞれが考え、自発的に行動したのです。

しかし、つくづく思うことは、瞬間的な出来事的时候は、人はマニュアルでは動けないということです。こういうときは本心が出るわけです。だから今まで人と言葉も交わさない子どもが声をかけて「ありがとう、お兄ちゃん」と言われると、そのことに感動して動き出す。

こうした自ら市民同志として助け合う、そのこ

とに生きてくる教育の力の大きさを、もう一度確認する必要があるのではないかと思います。

教育の再生へ～命の大切さも含めて～

今の学校教育には、いじめがあつたり、指導要領が混んできてスケジュールが過密になったり、管理体制が強くなつたり、教師が疲れちゃって過労死が起きそうとか、悲観的な材料ばかりがあります。確かに21世紀に学校教育が器を変えなければ、適応しにくくなっていることは事実なんですけれど、その中で教育の再生を考えるとというときに、今度の震災の体験というのは、絶対欠かしてはいけない問題だと思います。

また、何を考えても「命の大事さ」を教えなければならぬという話も出ています。「命の大切さ」をどうやって教えるか。「人の命を救うためにやれることは全部やろう」ということを、日頃から子どもたちに教えておかなければならないということです。今までこうした緊急のときの命の大事さ、何ができるかということを見せて来ただろうか? 概念的には教えてても、緊急のときに本当に子どもが命の大事さで動けるようなことを教えたかどうかという反省があります。

自分で動ける子ども、そして助け合える子どもたち。命の大切さについてもただ「命が大事です」と教えるよりも、今回の震災で得たくやしき、命の大事さを忘れないで語り継いでいくことをしなければならぬだろうと思います。

このように教育の再生の芽が、今度の悲惨な震災の中にもあるのだということを、忘れてはならないと思います。

地域の中での我々の仕事の重み

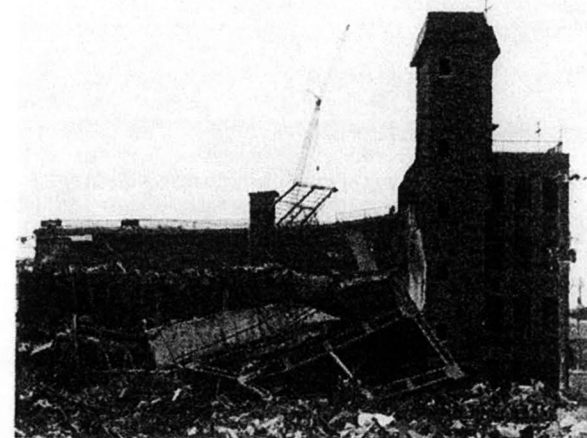
3月中旬に東京で震災について学びました。そこで保健婦の方が約2週間現地へ行って、学校に

救護所を作って活動したという報告がありました。

その中である保健婦の方が「私が現地に行って感動したのは教師の活動です」と言っていました。教師がじつに学校の中で細々とした被災者の生活の世話をやいていた。その活動をここでも非常に評価しておられましたが、私自身は若い保健婦がそこから実によく学びとって仕事に生かしていることに深く考えさせられました。

また、地域にあることの重みが学校にあるということ。地域を掌握している強さ、そのことを一番よく分かっているのは保健婦なんです。震災現地へ行って地域を掌握している人たちから情報を得なくては、何一つ動けないということをよく知っているんです。お医者さんは来る人を待っていればいいんですけど(笑)。

ほっとけない人たちに、診療活動や救護活動しようと思うと、自分から出ていかななくてはならない。本当に隠れて困っている人を応援しなければならぬ場合は、地域を掴んでいるということが非常に大きい、その役割を学校こそが、教師、養護教諭こそが果たしているというのです。こうしたことから、つくづく学校は役所的ではなく、地域のセンターなのだと思います。実際に地域を知っているということが、こういうときに大きな力を発揮するのです。



専門家としての意識について

医療の方面では全国からの応援があり、救護体制がすごくよくとれました。行政が各地の私立や国立の病院の保健所から救護者の派遣をしたのです。学校ではあまり知られていないかもしれませんが、各都道府県すべての衛生局から「ボランティアを出すように」という指示があったと言われています。衛生行政が配置に協力して、診療を中心とした、もしくは地域をまわった保健指導的な保健所と医療機関の共同した診療活動を、1月下旬から早く始めました。

しかし、各地の衛生局は医師や保健婦を派遣するなど動いたのに、教育委員会は全国どこも動かなかつたのではないのでしょうか。衛生局がなぜ保健婦を派遣したかということ、現地に専門家が欲しいからです。じゃあ、教師という専門家はいらなかつたのでしょうか。

たとえばある先生が、「自分はどうしてもボランティアに行きたい」というときは、休暇は出してくれます。「休暇をとっちゃいけない」ということはしなかつたんですけど。その先生が自分の意思でボランティアに行くと、物資を運んだり、かたづけたり、教職者でも、まず労力としての奉仕をしているのです。なぜかという組織だって派遣していないからです。もちろん、その人手もとても必要です。しかし、個人でボランティアに行った時、教育活動をかきわけて避難所ですることは困難です。それが保健所が派遣しているのと全然違うわけです。専門家集団という意識で参加し、受け入れる態勢がなかつたのです。

それでは現地の教師たちはどうだったのでしょう。現地の養護の先生方から伺ったのですが、避難先の子どものところを回るんです。これは少し落ち着いてからの話ですが、担任は避難所の

中の子どものところを午前中ずっと回って「元気あるか」と確認をし、観察をして来る。そして、学習のプリントを配るのです。指導要領通りに学習が進まない困るからというものもあるんでしょうけど(笑)。でも、何かさせなくちゃいけない。小さい子には絵を描くことでもいいからと教材を作ったり、ちょっとは漢字も書いてみよう。それで翌日そのプリントを次のものと取り替えて、職員室で採点する。こんなふうに教師たちはクタクタになるまで働いているわけです。

そういう現場にこそ、担任教師を派遣して、相談相手となり、集まった応援の教師には採点をしてもらう。担任はもっぱら子どもたちを直接指導するほうに変えればいいんじゃないでしょうか。

教師が子どもの生活を聞き取り、語り合う。それがとても必要な時だったのでから。

また、専門家を派遣するという形をとらなかつたことが「日本の教育は何をやっているんだろう」という感じがします。どこの教育委員会でもいいんです。神戸や兵庫の教育委員会と連絡をとって「教師を派遣しましょう」と、ひとつやれば、どんどん波及していくんですけどね。

もっと柔軟な発想を

このように、専門家集団として保健所でも医者でもいい活動ができるのに、教師が専門的な応援ができなかつた。個々の教師が教育者として持っている感覚が、現地で組織されないわけです。その自由がないのです。現地の人からの要求があつてそれに応えたいのに、その意識が組織されないで校長先生だけが夢中になって責任を感じてしまう(笑)。校長先生の頭の固さってわけではありませんが、子どもをつかみたい、震災から1か月以上すぎて教育活動したいと教師の要望が出てきているのに、救援活動で手一杯になって「この人

たちの命は私が預かっている」という救援責任者として動かざるを得ない立場になってしまわれた。一生懸命さがあるけど固いから、自分が今、何をやっているか、行政者に来てもらって交代し、教育の専門家として何をやらなければいけないのか考えたいということよりも、学校建物管理のほうが優先になってしまう。

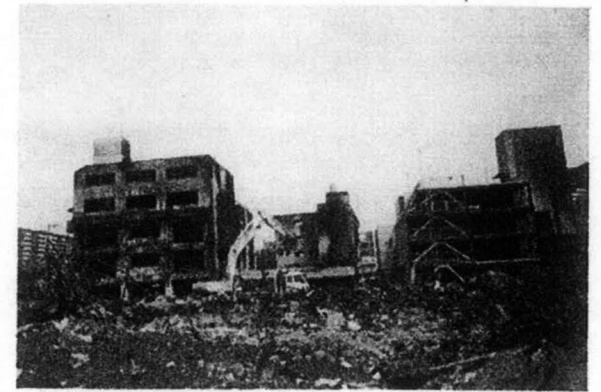
大切なことは子どもたちに何をするかということ、校長先生はまだ現場で手一杯だとしても、教育委員会や文部省がそこへ専門家を派遣するという柔軟な発想が出てこない現実があるのです。今日まだまだ残る子どもたちの心の衝撃の負担や学力への配慮に、積極的対策の提言が発想を変えて出されることが重要だと思います。

福祉の問題も教育の問題も、現場から出ている問題が、実践的な政策の論理できちんと分析され、適切な施策に実ること行政の姿勢が問われるのだと思います。教育関係ではその点がとても弱い。教師が要求しても校長でストップしてしまう。それ以上、上に行かない。それに上もそういう発想がないから動かない、そういうことが今回でもはっきり出たという気がします。

保健婦の活動から学ぶこと

前述した3月の学習会で、城東保健所(東京都・江東区)の、ある若い保健婦の方から「私は現地に行かなかつたけれど、実際に行った人の話を聞いて、自分は何をすべきかを考えた」という報告がありました。

職場ですぐに話し合つて、どういうことをしたかということ、地域で人工透析をしている患者さんにアンケートを出した。震災などで自分のかかりつけの医療機関がだめになってしまうかもしれない、そういう場合のために継続医療を受けている患者さんの家から、最も近いところを紹介できる



システムを作っておこう。また、薬を何日分しか持っていない患者さんには、1週間分、必ず予備に持っていて欲しい、というような保健指導を始めた。このように現地を訪れた人の生の声で、専門家として自分の立場で考えたときに、何をすればよいか考えるということが、非常に大事な学習になると思います。

また逆に、そういう現地に行った人がどんどん報告を出さなければ、何をすべきか見えてきません。私が先ほどから一貫して話していることは、緊急事態のときには、専門家は専門家なりに、個人は個人なりに、自分がどのように行動するかということに対して積極的な意識を持たなければ、お互いに助け合う効果的な体制が作れないということです。

その保健婦さんの話を聞いたときに、このことを養護教諭に置き換えて考えてみました。どうしても現地の養護教諭たちの困ったこと、赤裸々なことそのままを話して伝えてもらいたいという願いが強くなり、現地をお訪ねしてお話を聞いたんです。生の声を聞くということは大切です。

だから、まだ、みんなの胸が熱く感じているときに問題を聞き出すことを、こちらが自発的にやらなくてはいけない。待っていて誰かが教えてくれる。そのうちに周り回って上のほうから通達が来るなどというものではありません。こうした活

動を、養護教諭が自発的にやる柔軟性と積極性があるかどうか、その意識が求められると思います。

震災直後の話

養護教諭の仲間4人と現地を訪れて、神戸の養護教諭の方にお話をお聞きする機会を得ました。震災当初は「一瞬の間に文明の中から閉ざされて原始の中に放り込まれた」という状態だったそうです。震災が起きて3、4日は、何をしようにもできない状況だったということです。養護教諭は何をすべきかなどの枠組みでは考えられなかったということです。

保健室はというと、そこが一番先に避難して来た方々に占拠されてしまう。なぜなら、保健室には流しがあって水が出る。ふとんがある。少しだけけれど薬がある。ガーゼやタオルもある。誰がどこに居なさいなんて、指示はありませんから、誰だっが一番いいところに行こうと思えば、校長室などではなく保健室なのです。しかしそうすると、みんなおしりを落ち着かせて座ってしまって、その場所は救護所には使えない。保健室は救護所には成り得なかったわけです。それにみんなを救護するほどの材料をおいてあるわけではありませんし、消毒薬や包帯がチョビつとですから、そんな

のすぐになくなってしまいます。だから保健室だけが独特の役割を持つなんて望んでも無理な状況なのです。

そういう状況で、1月の末日からようやく対策が出始めたそうです。市の対策本部から視察が来たのですが、市の対策本部は早いんですね。視察に来たときにはもういろいろと要望や現状を把握していたそうです。だからこそ自治組織があり、行政へ働きかけたところは早く対応がとれやすいのです。小さい集団だったり、要求がまとめられていなかったりだと、どうしても後回しにされてしまうことを知りました。学校再開がどういうふうに行なわれるかなどと言われても、答えが用意できないのです。被災者への救済がほとんどだったということです。

収容した被災者の健康状況を把握し、保健支援をして救急医療班につなげた、すぐれた活動をされた養護の先生も実際にはおられました。保健婦活動の経験のある方でした。看護職でない若い養護の先生では、地域住民への保健救護の中心にはなり得ないでしょうね。学校が緊急の避難所になることが明らかな現状では、保健室の医療薬剤の備蓄や、場の確保としての用意は地区行政として考える責任があると思います。

人数の把握～いざというときのために～

学童・生徒の人数の把握、とにかくこれはものすごく大変なんですね。結局そのことは地域を把握するってことにつながるわけです。

養護教諭はこういう場合、「どの子のお母さんが入院していたとか」「誰ちゃんは慢性疾患があるが大丈夫か」など、健康に関連したような情報や家庭事情はよく知っていると思います。だからこういった子についての情報も出し、先生方の持っている個別の家庭状況の情報も出し合わせて、

できるだけ微細な子どもの掌握地図なり掌握名簿を学校側で作っておくと、いざというときに非常に助かると思います。そしてこういうときこそ、養護教諭が活躍するのではないのでしょうか。

また、児童把握に関して言えば、健康上の問題は二つあるわけで、震災という非常事態で起きたものと、以前から抱えている疾病問題ですが、健康管理の担当者として、まずその子たちの消息や、必要な医療がされているかどうかを確認することが大切だと思います。

児童の把握にはそういう健康の情報がとても大切で、また、それが出せる立場にあるということも、もう一度確認しておかなければいけないという気がします。なぜなら、いい仕事をしようと思えば、教師たちが力を合わせなければできませんよ。どんなに優秀なリーダーである校長先生や教頭先生がいても、その方たちに指揮をとってもらってやるというよりは、教師たち自身が力を合わせてやらなければならない。一番大切なのは、子どもたちの実状を把握し、子どもたちに必要な対策をとって護り抜くことです。

しかし、子どもの数の把握ってことは日本の義務教育では非常に重要なのです。毎日毎日、在籍確認ばかりやって報告する。けれど「転出しちゃった」「また帰って来た」ということの繰り返しだったと伺いました。毎日毎日、在籍数の「訂正、訂正」でおかしくなっちゃったって言っていました。「何でそんな数を合わせることはばかりやってるの」って聞いたら、「それが習性なんです」って(笑)。だから最後の段階になっても、何名亡くなって何名疎開したのかまだ分からない、数がきっちり合わない、惨憺たる状況だったそうです。それなら「5日ごとに日にちをきって調べるとかすれば」って誰もが考えますが、そういう能率が非常にできず、苦勞されたようです。

教師の労働強化

その他、話を聞いた上で私が言いたいのは「教師の労働強化」です。

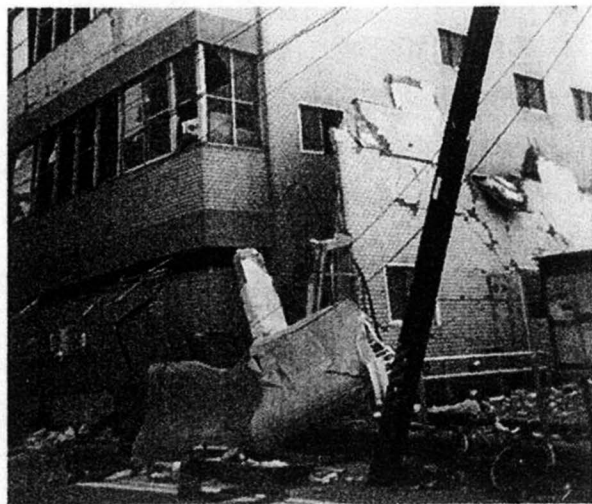
というのは、家が大丈夫だった人で献身的な人は、学校が心配で見に来ますでしょ。しかし一度来るともう帰らない。というか次々と仕事があって帰れなくなってしまう。女の人なんかは家に子どもがいる人もいるから困りますよね。被害が大きい教師はもっと大変です。

これは本当に赤裸々な話なんですけど、泊り込む人が男の人ばかりになって来る。女の方は自分の子どもを抱えていたり、お年寄りを抱えていたりするので帰りたい。でもそうすると、「頼り無い」みたいなこと言われ、非常に肩身が狭い思いをする。親と同居していたり、意外に身軽に出られる独身の人とかは意気揚々としていたらしいですけど(笑)。

「まあいろんなことがあるもんよ」となぐさめ合いましたが、自宅に帰らねばならぬ教師を見るその目つきが非常に非難的になる。特に管理職の方がね。「おまえ何やってんだ」って。とくに校長先生と教頭先生が「俺らは主軸でやっているのに、おまえらは」って、そうすると何も言えなくなってしまうという辛いお話でした。

だけど一生懸命やっている人はみんな体を壊している。あまりやらないという人もいなければ、交代できないじゃないですか。

校長先生のほうも5人欲しいところを3人で我慢したり、6人いたら3人ずつの交代にするとかしないと、みんなつぶれてしまいますよ。そうした状況がいつまで続くかわからないのですから。だからこそ、お互いに思いやり、調整し合える職場が民主的なところはできるわけです。だからいざというときに、職場の体制が指令系統だけで



やっているとだめなんですね。指令を出すのはたいがい校長先生ですが、職場が話し合って交代制をとっていかないと、そういうとき職場の自治的能力がないと本当にだめです。

「労働強化」というかたちでしか言えませんけど、日頃から学校内で誰もが協議できる体制を整えておくことが大切ではないでしょうか。管理的体制の強まり、それが今の学校を衰弱させているんだなど、とても感じられました。

子どもの話から～心の問題と個別対応～

子どもの状況に関してですが、子どものリアルな話を聞いているだけで胸がつぶれる思いがしますね……。今回の震災である子どもは「おもしろかった」というし、ある子どもは親を亡くしてしょげている。しかも、1キロの差でまったく事情が変わってしまう。

たとえば小2の女の子で退行現象起こした子がいました。だけど親がものすごく忙しくて、退行現象を受け止めてあげる人さえいればなんかなるのに、それを受け止めてあげる人がいない。

それから、ある中学生の子どもたちが大喧嘩した。原因は何かというと、震災による被害の大きかった地域の子と、そうじゃない地域の子とが学校が始まってやって来ますよね。すると、被害の大きかった地域の子は親はかまってくれないし、気持ちのもっていき場がなくて、イライラしているんです。それが原因で喧嘩になった。被害に遇わなかった子との差が大きい。後でその大変暴れた子の父親を呼んだんだそうです。父親の話を知ると、家が震災でつぶれて、今、避難先にいるのだけれど、失業してしまったということです。そのことで家の中がもめてるそうです。子どものほうも明日はどうなるか分からないということを感じているから、「あの子自身が悪いんじゃない

んです。親の甲斐性が……」って父親は言われた。親の甲斐性なんて言えないですね。

こうした養護の先生は口々に語られた事例に胸が痛むと言われました。

子どもの状況でもう一つあげると、登校拒否の子のおばあちゃんが災害で亡くなってしまった。するとお母さんは自分の母親が亡くなったものだから、緊張してはりつめて暮らすようになってしまっている。それまでは、子どもの登校拒否をすごく心配していたんだけど、逆にそうした問題がうるさくなって、かまっていられない。今までなら子どものほうも家庭内暴力を起こすとかして、親の注意をうながすということもできるんですが、暴力をしているヒマもないもんだから子どものほうも非常に心細くなってしまっている。こうしたケースの場合には、お母さんと子どもの両方に手を伸ばさないといけなくなっているのです。

事例をあげるときりがありますが、どの子ども大なり小なりそういうものを抱えている。だから現場の養護教諭の方々は、とりあえず学校は再開したけれど「問題はこれからだな」というのが実感だと言っていました。「今後、どうしたらいいのか、それがとても大きな問題です」と。

しかし、「こういう事例をきちんと報告しあわなくてはいけないよ」「今、把握しとかなければ、養護教諭がその気にならなければできないよ」と話し合われました。個人個人が受けた境遇差と、それに対する手だてというものを記録に残しておかないと。次にどこかで何かあったときに絶対に参考になると思います。なんといっても、心の問題ってずっと後にまで引きずる問題ですから。関心が下火になると、どういうことがあったかわからなくなってしまう。

一人ひとりの境遇の違いから来ている、打撃の大きさの違いが心の問題になっているんですから、

それに対してどのような対応をするか。一人ひとりに考えねばなりません。それこそ応援が必要になることです。心の問題がいっぱい出て、すぐには個別対応がしきれない状況ではない。だからこそ先ほどの「専門家派遣」、そういう体制が教育にもう少しあるといいと思う。

お母さんや大人の被災者の方々へのカウンセラーの派遣はテレビでよくやってましたね。ただ聞くだけでも違っていったというのがありましたけど、子どもたちに関しては早く、ずっーと持続できる対応で考えてほしいですね。これからの子どもの状況については3月末段階で聞いたものなので、これからもっと出てくるでしょうね。

希望を持つことへの確信

今回の震災で感じたのは、いざとなると、すぐ教育が期待し得る側面と、教育の遅れている側面とがよく出たという感じがします。災害から学

ぶことってすごくあると思います。こういうときに本当の人間性とか考え方が出ますから、そこから学ぶことなしには、論評だけではどうしようもないと思います。私も今後も阪神大震災を追って、いろいろ学ばなくていけないと感じています。もっともっと現場の人の声を聞かなくては。だから養護教諭が何をやれたのかという枠組みだけではなく、教育現場、学校の役割として大きく考える必要があります。

世の中の移り変わりは早いけど、現場にいる我々が、どうやって今回のことを生かしていくかなると、地道にじっくり構えていかないといけないと思います。命の大切さを教えるプログラムひとつとつとつでもです。

希望を持っていかなくてははいけません。人間が希望を持つことが大事なんだってことが、確信となって教師や子どもたちに宿せたら、教育の役割は大きいと思います。

教育史料出版会

〒101 千代田区三崎町1-2-2
☎03(3291)3571



性交を語る

10歳までの性教育で子どもが変わる

野村正博(天童北部小学校教諭)
日本で初めて等身大人形を使って性交と出産の授業を試みた著者の25年の実践記録! いきいきと授業を楽しみ子どもたちの声と作文多数。
☆1545円

●10代のセックスを認めますか
ホシネで話しちやう女の子の性
姥名敬子・山口美貴子
☆1339円

●働く母親から娘たちへ
自立をねがう性のしつけ
小野清美
☆1339円

●子ども・親・教師のいじめ体験200人の告白
なぜボクはいじめられるの
朝日新聞社会部編
☆1648円

●登校拒否・私たちの選択
僕らしく君らしく自分色
東京シユーレの子もたち編
9月初旬刊
☆予価1442円

●僕君第2弾・18人の手記
☆予価1442円